

IT Topics & News

『IT人材白書2018』を発行 価値創造型のIT人材が求められる【IPA】

独立行政法人情報処理推進機構（略称 = IPA）は、2017年度IT人材動向調査を実施。4月24日、その調査結果を取りまとめた『IT人材白書2018』を発行した。同調査は、IT人材育成施策に必要となる基礎データの収集や、IT人材をとりまく環境や動向、人材個人の意識の把握などを目的として2008年から毎年実施。調査の翌年に『IT人材白書』として発表している。

IoTやビッグデータ、人工知能（AI）など、技術の急速な発展により、新たな社会変革を目指す第4次産業革命において、IT人材の確保はどの企業においても重要なものといえる。今回の調査では、IT企業における人材の「量」を「大幅に不足している」と回答した企業が29.5%と過去最多を記録。また、IT人材の「質」に対する不足感も「大幅に不足している」との回答が29.7%と、2008年の32.4%に次ぐ結果となった。

ただ、技術革新が進んだ結果、企業が求めるIT人材の「質」の中身にも変化が訪れている。今回の調査ではIT人材に関わる事業・業務を「価値創造型」と「課題解決型」の2タイプに分類。「価値創造型」とは、事業の価値創造など、要件が不確実で独創性や発想力、スピード感が求められる業務。対する「課題解決型」は、既存システムの効率化や情報処理を目的とし、課題がはっきりしていて正確性が求められる業務。各企業がIT人材に求める「質」の上位は、いずれも「高い技術力」「自発的に動

く力」「IT業務の全般的な知識・実務ノウハウ」の三つだったが、「IT業務の全般的な知識・実務ノウハウ」は、課題解決型は1位だが、価値創造型では3位。また、課題解決型の人材には「IT業務の着実さ・正確さ」（8位）が求められるが、価値創造型は「問題を発見する力（探索能力）・デザイン力」（5位）、「新しい技術への好奇心や適用力」（6位）、「独創性・創造性」（8位）が上位となった。近年は価値創造に関わるIT人材の需要が増加傾向で、価値創造型の人材が「大幅に不足している」との回答は44.5%と、課題解決型の21.1%を大きく上回った。

一方で、社内の雰囲気や風土、風通しの良さなどが、IT人材の「質」不足の解消に効果的なこともわかった。

企業文化・風土などを調査した結果、社内の風通しが良く企業理念や文化が浸透し、自己啓発支援や実力に応じた待遇などを導入する、従業員満足度の高い企業での「質」の不足感は18.2%。対して、従業員満足度の低い企業では「質」の不足感は43.2%にも達した。社内の風土やモチベーション向上のための施策が会社の居心地を良くし、人材不足緩和に大きな影響を与えているということが明らかとなった形だ。また、IT人材の「量」に対する不足感は、企業文化や風土に関わりなく30%前後で推移しており、企業風土と人材の「量」不足の関連性は「質」ほど明確ではなかった。

調査開始から10年が経過し、IT技術は常に進化を続けている。求められるIT人材も細分化され、企業と人材のマッチングが、より重要になってきたといえる。

FUJITSU Human Centric AI
ジンライ
Zinrai
富士通のAI(人工知能)

FUJITSU
shaping tomorrow with you

「Zinrai(ジンライ)」は、人と協調する、人を中心とした富士通のAI。
人の創造力や可能性を引き出し、社会に新たな価値を創出します。